

が歸るのを見送つた。
 毎日毎日やかましくいつて居か余も明日からは

れないと思ふと何となくかなしいやうで……子供
 等が「先生さよなら」「先生さよなら」「小さい頭を

さげて行くを見ては猶更であつた。

この時尋二の男女二生、余の控室の戸の所へきて
 プツプツ……「いはうや」……「でもはづかしいも

の……」「かまやしないよ」……やがて戸を開いて
 二人が口をそろへて、

「先生おきけんやう。さよなら」といつて、ニコニコ
 して走つてかへつた。

洗濯の仕方

丸山芳子

一口に洗濯といへば、絹布も木綿も一様に石鹼
 や其他のものを附けて手で揉むものゝやうに思は
 れるか知らないが、それは決して爾うでない、絹
 布類のやうな薄い地のものは、爾ういふ事をすれ
 ば一度で忽ち地質を傷けてしまいます。でありま
 すから絹布類は手を以て揉むべきものではないと

心得て居れば宜しいのであります。之に反して木
 綿の類は兩手で揉むのでありますけれども、その
 揉むにも揉みやうがあつて同じ揉むにも兩手に餘
 り力を入れられないで、布と布とが軽く當るやうにし
 て揉まなければならぬものであるのに、急に奇
 麗にしやうと思つて、力任せに揉む方などが何う
 かするとあるのであります。其様な事をします
 れば、垢の落ち方が斑になるばかりでなく、第一
 自分の手を傷め刺へ布帛の地質を損するから、そ
 れを再び衣服等に仕立ますと、何うしても其所か
 ら早く破れるのであります。一體洗濯といふもの
 は爾う性急にすべき者ではありませぬ、所が往々
 之を早くして仕舞つて、次に何々といふやうに焦
 慮つて、大部當時流行の洗濯板と稱するものを用
 ぬらるゝやうだが、之を使用するにも敷布とか寢
 衣とかいふやうなものは關ひませぬが、品により
 ては決して用ゐてはならないのであります。何故
 なれば、布帛の地質を損するからであります。地
 質を損すれば、ツマミ三年使用に堪へるものも、
 一年か半年しか役に立ぬとになるのであります。